

会 告

平成四年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日(月)午後一時より楽友会館において開催されました。

公開講演は浜田正美、藤縄謙三の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終わりました。

聖者の墓を見つける話

浜田正美氏

世界史の青年時代

としてのギリシア

藤縄謙三氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成四年度会務報告がなされました。

平成四年度

史学研究会大会講演要旨

聖者の墓を見つける話

浜田正美

宗教や宗教的感情というものは、我々のこの世界のほかにより高次元の実体が存在するという予断を含んでおりますから、そうした不可視の世界の消息に通じ、その神秘に参入することによってこちら側の世界の在り様に変更を加えることが出来る人間は、常に崇拜の対象とされて来ました。事柄は極めて普遍的、通文化的であります。事柄はイスラム世界、殊に中央アジア、そのうちでも特に東トルキスタンの聖者(墓)の崇拜についてお話し申し上げます。

「聖者」を意味するアラブ語はワリーと申しまして、原義は「誰かの近くに居る者」「親しい者」、従って友人という意味になります。「神の友人」である聖者に対しては、神の恩寵(カラーマ)は他の者に対するよりも厚い筈でありまして、普通の人々が自らもその恩寵に預りたいと願うところ

に聖者崇拜という現象が出現致します。聖者に対する恩寵が即ち、聖者を通じて示される神の奇蹟であります。聖者は奇蹟の仲介者であって、その原因は神以外にはないという神学的認識は、民衆的な信仰世界では、奇蹟に対する切望そのものによって脅かされているようにも見受けられます。

マグレブにおける聖者崇拜を研究したE・デルマンガンは、聖者には二つの範疇(民衆の聖者/文人の聖者)があると指摘致しました。前者はいわば口承世界の存在で聖者伝もなく、限られた地域でのみ崇拜されているのに対し、後者はれっきとした聖者伝を持ちより広い地域の人々の崇拜を受けているとのことでもあります。この観察は、イスラム世界全体にも妥当すると思われ、ますから、イスラムの聖者崇拜の全容を知るためには、最低限この二つのタイプについてのケース・スタディーが必要となります。が、先ずは、十四世紀にモグーリス・タン・ハン国のトゥグルク・ティムール・ハンを改宗させた聖者として知られるホルジャ・アルシヤド・ウッディーンに対する十九世紀中葉における崇拜の様相を御紹介致します。

アルシャド・ウッディーンのマザール（墓廟）は今日もクチャの町に現存致しております。現在では廟の外には、小規模な墓地、モスク一座それにマザールのシャイフの住居があるだけです、十九世紀の史料によればハーンカー（スーフィーの修行道場）が付設されていたことと、マザールが相当のワクフ（所有権移転停止財産）を有していたことが知られます。十九世紀半ば、この墓廟コンプレックスとでもいうべき宗教施設の主人公は、聖者の十代の後裔とも称されるラーシディーンなる人物でありました。彼は、マザールと付設のハーンカーのシャイフであり、それらに付属するワクフ財産の管理者であり、恐らくはモスクのイマームでもありました。彼の宗教的権威の源泉はマザールに埋葬されている聖者であり、彼は祖先の霊と霊的に交流することが出来ると見なされておりました。

現世を去った聖者たちの霊魂は、全体として「良き諸霊」（アルワフ・タイイブ）と呼ばれる一種の集合体を形成しておりますが、個々の聖者の個性がそこに解消されてしまった訳ではなく、個性としての聖者の霊魂はそのマザールに留まっていると考

えられます。彼の世界からはこちらの世界のどの地点とも接触可能ですが、こちら側から向こうと確実に通信出来る場所はマザールだけであります。ラーシディーンはここに参籠し、聖者の霊魂に向かって精神集中を行い、断食・不眠の苦行とともにコーランなどの聖典を誦誦してその功德を聖者の霊魂、従って集合的には「良き諸霊」に供養致します。これに対し、聖者の側からいけば互酬的に様々な霊的な援助が与えられますが、その第一はタルビヤ、即ち神秘道における師匠の弟子に対する教育であります。第二にはビシャーラというものがあります。これは参籠中に、恐らくは夢の中で示される聖者からの告知、殊にある行為を実行に移すことに對する認可を意味します。一八六四年、ラーシディーンは聖者のビシャーラを受けて始めて清朝に対する反乱に踏み切ったと伝えられております。第三のマダードはより一般的な意味での援助・加護であり、最後のバラカは、例えば身体や衣服による直接的接触によって第三者にも及ぼすことが可能な、神から与えられた霊的な力であります。

一方可視世界ではどうかと申しますと、

ラーシディーン（ハーンカーにはハリーフ（師の免許状を得てその代理を務める者）やムリード（一般の弟子）たちが居り、彼が護持するマザールには遠く西トルキスタンの出身者を含め多くのニヤーズマンド（参詣人）がありました。ニヤーズとはベルシヤ語で、その原義は祈願・懇請でありますから、ニヤーズマンドとは元来祈願を持つ者を意味しますが、祈願者は祈願とともに布施や献納をもたらすのが通例でありますから、ニヤーズはこうした献納物をも意味するようになったのであります。こうした弟子や参詣人に対し、ラーシディーンの間からは聖者に由來する霊的な力が授けられました。即ち、ヒンマという神秘道の師が窮地に立った弟子を救うために発揮する力があり、先にも申しましたバラカがあり、又祈禱やファアティハ（コーラン開扉の章）の誦誦を授けた／受けた、という表現も史料には頻々に見られます。聖者のマザールは不可視世界と可視世界の結節点をなしており、マザールのシャイフはその結節点上で二つの世界を媒介していると申せましょう。

より民衆的な聖者につきましては、現在

のところ申し上げるべきことの持ち合せが余りありませんが、昨年と本年の新疆におきます限られた見聞から致しますと、規模

の大小にかかわらずマザール崇拜は現に盛んに行われており、参詣人の大多数は女性であり、病氣治癒や子授けのような具体的祈願のための参詣と同時に、いわば遊山的な参詣も盛んであり、シャイフ不在のマザールの場合でも参詣人と聖者の間には祈願・奉獻／加護・加福という交渉関係が存在する、ことなどを指摘出来ると思います。

ところでこうしたマザールが、どれ程の数存在するかということですが、一説では東トルキスタンのホタン地区だけでも二千（うち比較的影響力のあるもの、先のデルマンガンの分類でいえば「文人の聖者」にあたるものは二〇）のマザールがあると言われております。イスラム世界では移葬の例はあったとしても稀であり、分骨の觀念は、（完全に不在であつたと断言は致しかねますが）知られていなかったと思われま

ルは「発見」されたのだということになります。以下マザールを見つける話のいくつかを御紹介致します。

管見の及ぶ限りではこうした話の最古の例はアフガニスタンのマザリー・シャリーフであり五三〇（一一三五——一三六）年にアリーの墓が発現しておりますが、この発見譚には、夢と発見の立役者という後代の数多くの物語に共通する要素が既に現れております。ついでながら、このアリーの墓は一時的に忘れられていたようで、ティムール朝時代には第二次の発見が行われました。

第二の例は、預言者の旗持ちアブー・アイユーブ・アンサーリーの遺体が、メフメト二世によるコンスタンティノープル征服直後に、この都の郊外で発見されたという事件であります。イスラムの征服を正当化するという意味でこの墓の発現は政治的事件でもありました。

東トルキスタンについて見ますと、十六世紀のホージャ・ムハンマド・シャリーフというスーフィーの活躍があります。彼は殆どマザール発見の専門家とも称すべき人物でありまして、サトク・ボグラ・ハン

のマザールを「再」発見した外、時のモグーリスタンのハン、アブド・アルラシードを或るマザールの発見を契機に自らの弟子とし、「時には町を時には村を旅なされ、あらゆる場所に横たわっている聖者を発見し、（その霊に）祈念し、旗印を結びつけてマザールとして」年月を過ごしていたと伝えられております。東トルキスタンの歴大な数のマザールの存在もむべなるかなと思われま

す。西トルキスタンでは、かつてカタノフによって紹介された興味深い例があります。バハー・ウッディーン・ナクシュバンドによってイルティシュ河方面で聖戦を行うことを命じられた三六六人のシャイフたちのうち、三〇〇人が殉教した。その後、ブラヤヒヴァからやって来たシャイフたちが総計四九人の墓を発見したが、そのうちの三〇の名と墓の場所を記す、というのがカタノフが公刊した写本の内容です、イルティシュ沿岸の西シベリアは、聖者墓の発見によってイスラム化されたと言っても過言ではなからうと思われま

す。前記の四九人の聖者の墓の発見が、事実「遺体」の存在に基くものであつたか否か

は不明でありますが、現在においても例えば山中の洞窟などで屍体が発見された場合には、これとマガールとして祀る例があります。一九九一年夏の調査中、こうした例を二つ聞きましたが、残念ながら現地を見ることは出来ませんでした。

現在の新疆では、マガールの発見はより公的なレベルでも行われております。『トルコ語詩集』の編者マフムード・アル・カーシユガリーと『クタドウグ・ビリグ』の著者ユースフ・ハース・ハーシブのそれぞれのマガール発見については、新疆の学術權威と目される人々により論文が発表されております。夢によるマガールの発見が、少なくとも公的レベルでは受け入れられ難くなった以上、科学が宗教に代わってマガールを発見するようになったとも申せましょう。十一世紀の二人の文人の存在は、現在のウイグル族から誇るべき民族的榮光であると見なされているという事情も考慮に入れる必要があると思われまふ。

さて、こうしたマガールがある場所について見ますと、スライドで御覧になっていたぎますように、その多くは泉、巨木、洞窟、巨石などの傍に見出されます。これ

は単なる偶然でありましょうか。憶測を逞しくすれば、こうした泉などのイスラム以前の崇拜物の傍らに聖者のマザールが発見された例もあるのではないかと考えますが、何分にも証拠の無い話ですから、出来れば私も聖者の霊からの告知を得て、真実を知りたいものだと存じます。

(聖者墓発見に関する文献の具体的な記述を含め、この譯文では十分に触れられなかった問題は『国立民族学博物館研究報告』に発表の機会を与えられたので、御関心の向きはそちらを御参照下さるようお願い致します。)

世界史の青年時代 としてのギリシア

藤 縄 謙 三

ヘーゲルは『歴史哲学』の中で、世界史を大きく四期に区分している。(一) オリエント世界(幼・少年期)、(二) ギリシア世界(青年期)、(三) ローマ世界(壮年期)、(四) ゲルマン世界(老年期)。しかし、世界史を人生に喩える四時代区分は、ヘー

ゲルの独創ではなく、既に半世紀も以前にヘルダーが歴史哲学の試論『これら人類教化のための歴史哲学』(一七七四年)の中で用いたものを、そのまま踏襲したのである。ヘーゲルの場合でもヘルダーの場合でも、この四時代区分のうち最も意味深長なのは、古代ギリシアを青年期と見なす点である。また、この四時代区分から離れても、古代ギリシア人の行動や文化を「若々しい」と形容するのは、むしろ常識的な見方だとも言えるであろう。

しかし、このような見方には正当な理由があるのであろうか。古代ギリシアにも老人は多かったし、しかも大いに活躍もしていたからである。従って、青年的と見えるのは、一種の錯覚に過ぎないのではないかとところが、ギリシア人自身も、エジプトなどの文明と比較して、新しい若い文明だと意識していたことは明らかである。そして、この相違は今日の歴史学の成果から見ても重要な事実である。即ち、エジプトやメソポタミアにおいては、青銅器時代の中央集権的国家体制が、鉄器時代に入っても存続し、更には強化されたのに対して、ギリシアでは青銅器時代の末期に民族移動によつ

て、文明の断絶が起り、初期鉄器時代の約三百年間は今日「暗黒時代」と呼ばれている。そして、この暗黒時代が明けて、古拙期に入ると、あの若々しい青年像や少女像が現れるのである。

ギリシア文明が暗黒時代から再出発したこと、ここにギリシア文明の若々しさの一つの原因があることは確かであろう。しかし、これは大きな背景であって、吾々としては古典期のギリシア社会の構造そのものの中に、若々しさを生み出す事情を探って見る必要がある。そこで最初に、ギリシア社会において青年がどのように評価され位置づけられていたかという点から検討する。ところが、一般にギリシア人の真面目な著作の中では、青年は肉体の美しさは別として、精神や道徳の面では批判されるのが普通であった。前七〇〇年頃の農民詩人ヘシオドスから始まって、前四世紀のプラトンなどに至るまで、繰返し同じような内容の青年に対する批判の声が響いている。青年は思慮を欠き、性欲などの欲望に支配される。三十歳、四十歳、さらには五十歳を越えて、やっと一人前になり、壮年としての完成期に入るものと見られている。このよ

うな青年たちの未熟さや自由奔放な行動は、実は彼らが責任のある地位に就くことができなかった事実と裏腹の、悪循環の現象であった。

第一に、ギリシア人男子の結婚年齢は非常に遅かったという事実がある。女子の十五、十六歳ほどに対して、男性は三十歳以上が理想とされていた。少くともアリストテレスによれば、その方が健全な子供を得ることができ、また親子の間が離れている方が、家産のことで親子の争いが起こらないからという理由による。即ち、家の経済の運営や相続制度と関係していたようである。とにかく青年たちは普通の場合、三十三過ぎまで独身で、経済的にも自立できなかったのである。

第二に参政権の問題がある。アテナイ人は、十八歳とか二十歳とかで一挙に参政権をすべて与えられたのではなく、年齢と共に少しずつ権限を獲得して行くのであった。十八歳で市民名簿に登録され、二年間、軍事訓練を受けた上で、二十歳から民会に出席できたらしいが、青年たちには余り発言の機会はなかったはずである。評議会の議員や民衆裁判所の裁判官は、いずれも三十

歳以上という条件があり、壮丁訓練官などは、同性愛を防ぐために四十歳以上とされていた。五十歳以上になると民会での優先的発言権が与えられ、外交使節にも選ばれたから、この段階で最高の参政権を得る。そして六十歳になれば兵役は免除される。

アテナイの上流階級の野心的な青年たちは、なるべく早く政治家として活躍しようとするが、このような年功序列があるために阻止され、焦りの気持をもっていた。そのことは当時の弁論家の作品やプラトンなどの作品から知ることができる。かくして青年たちは、家の経済の面でも、政治的にも、社会人としても半人前ということになり、それだけに閑暇には恵まれていた。少くとも上層階級出身の青年にとっては、この閑暇はスポーツや学問のために費すべきものとされていたので、青年期とは言わば教養課程であって、三十歳頃まで十年余も続くのである。青年期が異常に長かったことは、それだけ特定の社会の中における青年の数が多いということであり、社会が青年的特徴を強く帯びることになる。

これらの青年たちは政治的には半人前であったが、しかし三十歳と言えば、数学者

や物理学者ならば、既に天才を發揮し尽している年齢である。実用から離れた理論的また教養的な學問が、古代ギリシアで確立した理由は、このような長期にわたる青年期があったためだと考えられる。そして十年余りも教養課程を過ごせば、ソクラテスやプラトンのように、生涯を學究として過す者も輩出することになる。

そのような青年や老人の學究活動がプラトンの對話篇に描かれているのであるが、ここに登場するアテナイ人たちは、注目すべきことに、老いも若きも同時に軍人であった。ソクラテスの後半生、そしてプラトンの幼・少年期は、二十七年間にわたるペロポネソス戦争期であって、若者たちは戦地から帰って、しばしの平和の時を學問的な對話で楽しんでいったというのが、事態の真相であつたろう。とりわけ青年たちは重装歩兵隊の主力部隊を構成し、最も危険な部署についていたのである。「ポリスから青年層が取り去られたのは、あたかも一年から春が奪い取られたかの如くである」というペリクレスの「戦死者追悼演説」の言葉が示すように、戦死するのは主として青年たちであつた。ギリシアの學問が理論

的思索や形而上学的思索へ向かったのは、その担い手たちが死と直面して生きていたためでもあろう。

このようにして青年期の間に植えつけられた愛国心や理想主義は、多くの場合、壮年期や老年期にまで保持されることになった。ペリクレスやデモステネスの如き指導者、そして彼らを支持したアテナイ市民は、余りに強い愛国心や理想主義のために、大きな失敗を繰返すことになる。これらの失敗も青年期的な失敗のように見える。

ヘーゲルも言うように、ローマ人は自らの使命を自覚して、世界帝國を支配し平和を維持するために努力した。これは壮年期的な生き方であるが、ギリシア人は若さそのものであつて、その創造した文化は非実用的なもので、現実の歴史を動かす力を持たない。その政治的な行動も、明確な意味のある目標に向けて進むものではなかった。その意味でも古代ギリシアは、壮年期のローマと比較して、未だ進むべき方向の決定していない青年期の状態であつたと言える。

なお上述のように、ギリシアのポリスは徹底的に年齢別階層社会であつた。これを

社会人類学の立場から東アフリカなどの例と比較して説明すべきであるかどうか、私は今のところ判断を保留したい。しかし、とにかくギリシアでは年功序列制があつたために、ポリス全体が、生涯教育機関の役割を果たし、その中でも特に青年時代の教育が大きく目立っていたのである。